

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Note on the Dwellings of the Pulusuk Islanders in Micronesia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 基衛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004602

ミクロネシア・プルスク島における 家屋と住まいかた

中 村 基 衛*

- | | |
|------------------------------|-------------------------|
| I. はじめに | 1. <i>pasapasu</i> の構成員 |
| II. プルスク島の概要 | 2. <i>iaiorei</i> |
| III. 集落と家屋 | V. 家屋の建築様式 |
| 1. 集落 | 1. <i>ut</i> (カヌー小屋) |
| 2. 家屋 | 2. <i>im</i> (住居用家屋) |
| 3. 家屋の配置と道 | VI. むすびにかえて |
| IV. <i>pasapasu</i> における居住形態 | |

I. はじめに

この小論は、ミクロネシア、中央カロリン諸島の小島、プルスク (Pulusuk) 島における家屋と住まいかたの問題を、家屋構造と社会組織のふたつの側面から考察しようとするものである。

家屋の建築様式は、とうぜんのこととして、気候、風土などの自然環境を強く反映したものである。なかでも、建築材が家屋建築に与える影響はことのほか大きい。家屋建築様式はまた、家を取りまく文化、社会との関連において、人びとの住まいかた、家屋の機能に深いかかわりをもっている。このような視点から、この島の人びとにおける住まいとは何かを考えてみようとしているのである。

この小論の基礎的資料は、わたしの2度の中央カロリン諸島での人類学的調査で集めたものである。最初は、1974年8月から1975年2月まで、主として、サタワル (Satawal) 島で、2度目は、1976年7月から同年12月までプルスク島を中心に調査をおこなった。この小論は、プルスク島での調査資料にサタワル島での資料を若干くわえたものである。

資料の収集は、主としてカロリン語 (Calolinian) により、一部、英語で補足した。言語の表記法については、トラック語系のこの島の言語が確定した正字法をもたないため、主として、現地の人びとが、ローマ字を用いて表示する場合のつづりかたのな

* 国立民族学博物館共同研究員 甲南大学文学部

かでのもっとも一般的な慣例にもとづいている。したがって、適当でない表記のものもあるかもしれないことをことわっておく。

Ⅱ. プルスク島の概要

プルスク島は、中央カロリン諸島の東南端、北緯6度42分、東経149度18分に位置する人口約420人の小島である(図1参照)。この島の属するトラック地区(Truk District)の行政上の中心であるモエン(Moen)島の西南西298kmの位置にある。もっとも近い島、プルワット環礁(Puluwat atoll)まででも約70kmの距離がある。

この島は、近隣のプルワット、タマタン(Tamatan)島、および、プラップ(Pulap)島とともに、トラック諸島の西方に、ほぼ南北に位置することから“西諸島(Western)”と総称されるグループに入れられている。

島は、南北約3.3km、東西約1.2kmの大きさで、南北に長くのびた島である(図2参照)。環礁をともなわない隆起珊瑚礁の孤島である。海面下約1mにまで隆起した珊瑚礁の上に堆積した砂が陸地を形成している。したがって、海拔約3mの陸地はすべて砂地質である。このような島を形成した地理的要因を象徴するものに淡水湖

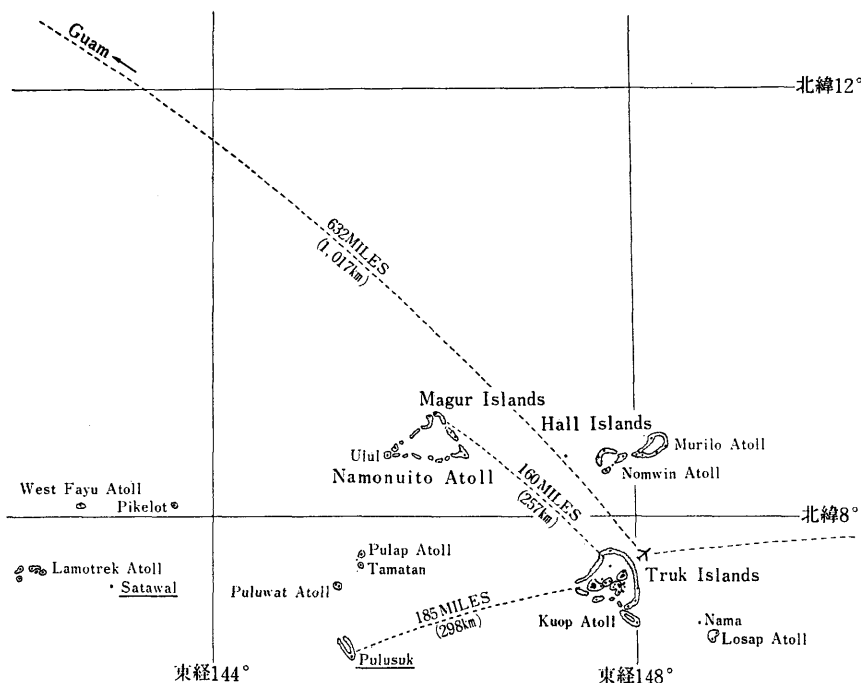


図1 Pulusuk 島周辺図

アメリカ空軍作成の地図 [1973] による。

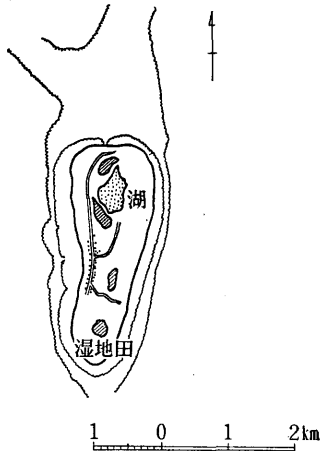


図2 Pulusuk 島

日本海軍の測量図 [1921] による。

(Lenamu) がある。島の北部内陸部にある淡水湖は、隆起珊瑚礁のくぼ地に雨水がたまったためにできたものと考えられる。くぼ地に砂が堆積したところは、雨水が伏流水のようになっていたり、湿地帯をつくっている。この湿地帯は、島の面積の約20%を占めている。この湿地帯には、タロイモ (Pula) 耕作のための湿地田 (muraru) が形成され、タロイモが豊かに育っている。伏流水は、砂を掘りさげ水浴場 (lerang) として利用されたり、井戸として炊事・洗濯用の水を供給している (図3参照)。

気候は、1年を2つの季節にほぼ大別することができる。南西季節風の吹く5月から10月にかけては高温で、11月から4月にかけては、ぎゃくに北東貿易風が強く吹き荒れ、気温もそれほど高くはならない。

このふたつの種類の風を利用して、帆走カヌー (wa heraru) による島と島の交流がしばしばおこなわれる。とくに、プルスク島の西北西約255kmに位置するサタウル島

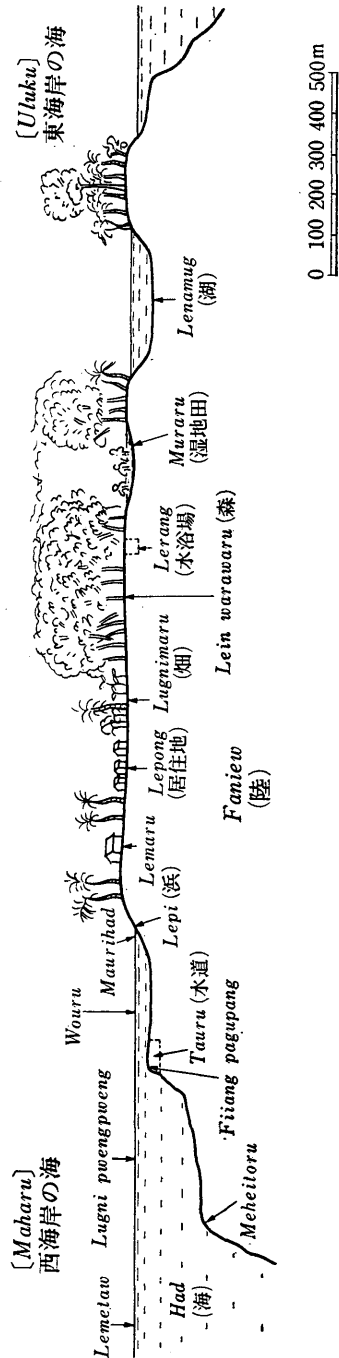


図3 Pulusuk 島の断面図

との間でおこなわれる遠洋航海は有名である。ほぼ東西の位置関係にあるふたつの島のあいだの航海は、北東貿易風を利用して東のプルスク島から西のサタワル島へ、南西季節風を利用して西のサタワル島から東のプルスク島にと、途中の無人島ピケロット (Pikelot) 島を経由しておこなわれる。3日から10日間の行程である。今日では、年5回、モエン島と離島とを結ぶ巡航船が、物資輸送などの交通手段として離島の生活に貢献している。しかし、プルスク島、サタワル島のように、それぞれトラック地区、ヤップ地区と異なった地区に属している島じまの交流は、巡航船が地区内でしか運行しないため、カヌーを利用するしかない。

西諸島、およびサタワル島近辺の中央カロリン諸島東部は、言語をはじめ、多くの文化要素に類似点を見出すことができる。家屋の建築様式もたいへん類似している。これらの島じまは、ひとつの文化圏を構成しているとみなすこともできる。これらのことは、島じまのカヌーによる交流が古い歴史をもち、移住の経路ともかかわっていることを示している。

島の生業経済は、タロイモ栽培と漁撈、およびパンノキの実 (*mai*) の採取が主である。この生業経済のありかたも、2つの季節に強い影響をうけている。11月から4月にかけては、強い北東貿易風を利用した、帆走カヌーによる引き釣り (*luku*) を中心に漁撈が活発におこなわれる。しかし、12月前後は北東貿易風が強く吹きすぎて漁撈活動はおこなえず、食物はタロイモだけにたよっている。それにたいし、5月から10月はパンノキの実の結実期であり、手漕ぎカヌー (*wa fatol*) を使用して底釣り漁法 (*iafi iafu*) がおこなわれる。風が弱く、おだやかな日びが続くためである。この季節は、食物が豊かな時期である。したがって、食物のなかで、年中収穫できるタロイモの占める比重はたかい。タロイモは、湿地で栽培されるため、島の形成に関連してできた広い面積の湿地帯を有するこの島は、食物確保の面で恵まれているといえよう。

島の生業経済は、原則的に自給自足である。島の唯一の換金作物はコプラ (*low*) だけである。コプラの価格は、1974年に100ポンドが 20 U.S. ドル (以下ドルという) の高値を記録したが、1976年には6ドルに急落した。そのため、この島の1976年の1年間のコプラ収益は約4,920ドル、1人あたりの収益は約12ドルにしかならなかった。いっぽう、物価は、工業製品の類をすべて輸入にたよっているため、日本以上に高い。

島をおおう植物は、海岸沿いの乾燥した砂地にマングローブ、パンダナス、ココヤシが茂り、ココヤシの下にはシダ類が繁茂している。内陸部には湿地帯を中心に、パンノキなど樹高 20 m を越す高木が茂っている。海岸部の植物相と好対照に、内陸部は湿地のジャングル (*lewara waru*) の様相を呈している。ココヤシは、種類の違ったものが海岸部、内陸部ともに分布しているが、ココヤシを除けば、海岸部と内陸部では植生の違いが明確にあらわれている。

島の生活と密着した関係にある代表的な樹木はパンノキとココヤシである。ココヤ

シは、屋根葺き材としてその葉が利用され、果実の殻からは繊維をとりだしてロープがつくられる。パンノキは、直径 1.5 m、樹高 20 m にまで成長するうえ、削ったりするにも、適度に柔らかい性質のものである。家屋、カヌーの建材として利用範囲はひろい。ココヤシ、パンノキともにその果実は食糧としての価値もたかく、この島の文化とは切り離せない関係にある。

プルスク島には、特定の女性祖先との系譜関係をおなじくする人びとによって構成される集団がある。これは *ainang* とよばれ、11の *ainang* がこの島で数えられる。島の人びとは、かならずいずれかの *ainang* に属している。*ainang* は、*lineage* の概念で把握できる性格のものである。この集団は、タロイモ田、ココヤシ林、家屋の敷地などの財産を共有する単位として、また社会的には、婚姻規制の単位として機能している。島の人びとの社会生活における基本的な集団として、この島の社会の性格を特徴づけている。

ひとつの *ainang* は、原則的にひとつの居住集団を形成している。この居住集団は、*pasapasu* とよばれている(写真1)。婚姻後の居住方式は、妻方居住をとっている。そのため、*pasapasu* の構成員となるのは、同一 *ainang* の同世代の姉妹とその配偶者、および、彼らの未婚の子女、独身男性、養子である。

ainang が所有する財産類は、そのまま *pasapasu* の構成員によって利用されている。したがって、*pasapasu* は、火とカマドを原則的にひとつにし、食物を共同料理し、構成員に公平分配している単位でもある。*ainang* が所有する土地からの生産物はもとより、島の男全員でおこなわれた漁撈活動により得た魚も、*pasapasu* ごとに分配され、一括して料理されている。*pasapasu* の敷地には、複数の住居用家屋 (*im*) と炊事小屋 (*morohaw*) が建てられている(写真2)。*pasapasu* によっては、他の種類の家屋を



写真1 伝統的家屋 (*im iani puun*) と *pasapasu* の風景

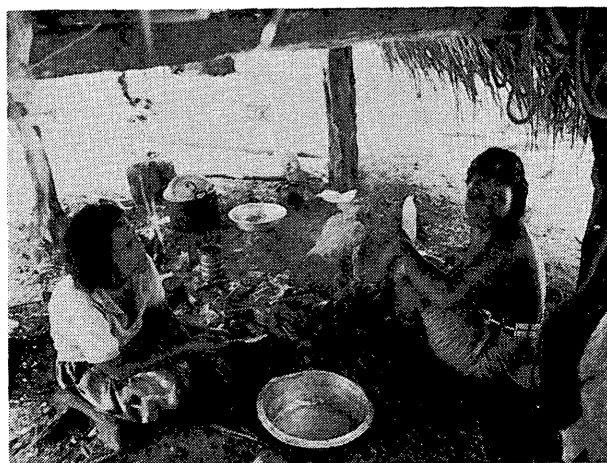


写真2 炊事小屋 (morohaw) での料理風景、タロイモの料理がおこなわれている。この場所で石焼料理 (umung) もおこなわれる。

備えているものもある。

アメリカは、1945年以来、ミクロネシアのほとんどの地域を占領、信託統治している。アメリカは、ミクロネシアの経済的価値には期待せず、軍事的にミクロネシアの地理的位置を評価し、多額の援助金を毎年与えている。そのため、ミクロネシアの政府は、援助金によってささえられている。1976年には、プルスク島に道路を建設するための名目で8,000ドル、日・米からの戦争賠償金が12,000ドル支払われた。ただし、日本はこれを戦争賠償金とはよんでいない。

1957年には、台風災害の補償の名目で、島内に35棟の木造トタン葺き住居 (*im ianiching*) の建築材が無償で提供された。同様に、アメリカの援助で、8年制の小学校、診療所が建てられている。

Ⅲ. 集落と家屋

1. 集落

プルスク島の集落 (*apinamung*) は、島の中央部の西海岸に沿って、带状に形成された集村の形態をとっている。今日の島民が、現在の位置に集村を形成した理由として、風、海流、水路の3つの自然的要因があげられる。

この地域には、北赤道海流が、常に東から西へと流れている。また、11月から4月にかけては強い北東貿易風 (*Iotow efang*) が吹いている。この北赤道海流と北東貿易風との相乗作用で、東の海岸の海 (*Uluku*) は大きく荒れることがある。そうになると、カヌーは浜に寄りつくことができない。それにたいして、西海岸は波が比較のおだや

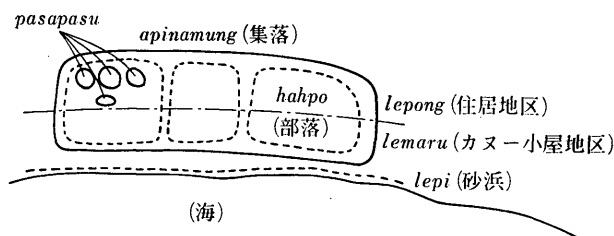


図4 集落の構成

かであり、カヌーの出入りに必要な水路 (*tauru*) も4カ所ほどあり、カヌーも容易に寄りつくことができる。

水路というのは、海岸線を取りまく珊瑚礁の一部が切れ込んだ部分のことをいう。日常、島の人びとが利用している水路は、幅約7m奥行き約30mほどのものである。珊瑚礁に寄せる波も、水路のなかではその運動がこらされ、静かな水面となっている。コの字型の防波堤の役割を珊瑚礁がはたしているといつてよい。

集落は、4カ所の水路のうちの上述の水路を取り囲むようにして形成されている。島の最初の住人であったといわれる人びとは、*aponipei* とよばれる *ainang* の人びとであった。彼らも、現在の集落から少し南側の位置に集落をつくっていたといわれているが、現在では地名に *aponipei* の名を残すだけでヤシ林となっている。

食生活のなかに占める食物の割合は、タロイモなどの農作物が主で、魚貝類などにたいし、圧倒的に優位にたっている。しかし、集落の形成の原理は、食物の量的依存度によっているのではなく、漁撈の原理にもとづいているといえよう。

集落 (*apinamung*) は、砂浜 (*lepi*) から50mほどのところに、ヤシ林に囲まれるようにして形成されている。ヤシ林は防風林の役割をはたしている。集落は、住居 (*im*) がたち並ぶ地域 (*lepong*) と、カヌー小屋がたち並ぶ地域 (*lemaru*) のふたつに区別されている。*lemaru* の背後に *lepong* が位置している。集落は、さらに3つの部落 (*hahpo*) に区分されている。これらの部落は、北側よりそれぞれ、Wichap, Lukeiseru, Neiwang と名づけられている。

部落は、それ自体では明確に独立した社会的機能をもっていない。まれに、部落の単位で漁撈を共同でおこなったり、島全体の作業を進行上の都合で部落単位に分担しておこなうことがあるにすぎない。部落はまた、いくつかの *pasapasu* の集まりによって成り立っている (図4参照)。Wichap は3つ、Lukeiseru は5つ、Neiwang は4つの *pasapasu* からそれぞれなっている。現在のこの島にある *pasapasu* は12である。

2. 家屋

現在のプルスク島でみることのできる家屋 (建築物) としては、つぎのような種類のものがある。

- (イ) *ut* (カヌー小屋) ……9棟
- (ロ) *im iani ching* (木造トタン葺き住居) ……36棟
- (ハ) *im iani puwn* (伝統的ココヤシ葉葺き住居) ……15棟
- (ニ) *puaikang* (コプラ乾燥小屋) ……8棟
- (ホ) *morohaw* (炊事小屋) ……17棟
- (ヘ) *im iani hahk* (物置, ヤシガラ入れのための小屋) ……17棟
- (ト) *im iani ianiw* (教会) ……2棟
- (チ) *bioing* (診療所) ……1棟
- (リ) *shuguwn* (学校) ……1棟
- (ヌ) *suiji* (給食用家屋) ……1棟
- (ル) *ofesu* (事務所) ……1棟

(ト), (チ), (リ), (ヌ), (ル) の建築物については, それぞれ, コンクリートブロック, ボルト, ナットなどを利用した近代工法によって建てられた建築物である(写真3)。この島で産する建築資材はまったく利用されていない。これらの建築物はまた, すべて公共の用途に建てられたものである。近代工法による建築物を建てるにあたっては, 島から選ばれた1人の男が, モエン島で半年間, 建築に関する知識と技術とをアメリカ人から学んだ。トラック地区の他のすべての島の近代工法による建築物も, 同様の教育を受けた人の手によっている。

このほかにも, 建築資材が, この島以外から運ばれて建てられたものに木造トタン葺き住居 (*im iani ching*) がある。*ching* の語源は英語の tin であり, トタンを意味する。

近代工法による建築物の登場とはぎゃくに, 現在では消滅してみこることができない建築物も過去にはあった。アメリカの海軍による占領時代が1945年に始まると同時に,

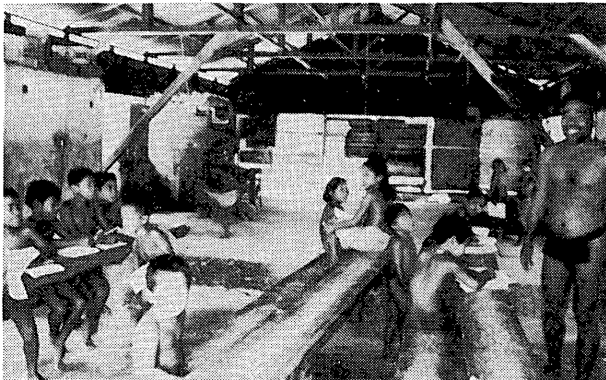


写真3 学校内部と授業風景, 右の男が校長先生

アメリカ人のキリスト教宣教師が、中央カロリンの島じまを訪れ、布教をすすめた。布教の結果、短期間のうちに、島の人びと全員がキリスト教信者化した。それにともなって、島の旧来の慣習はすたれていくものもすくなくなかった。伝統的な建築物であった *im iani kai* (月経小屋兼産屋) などは、その存在理由を失い捨て去られてしまった。

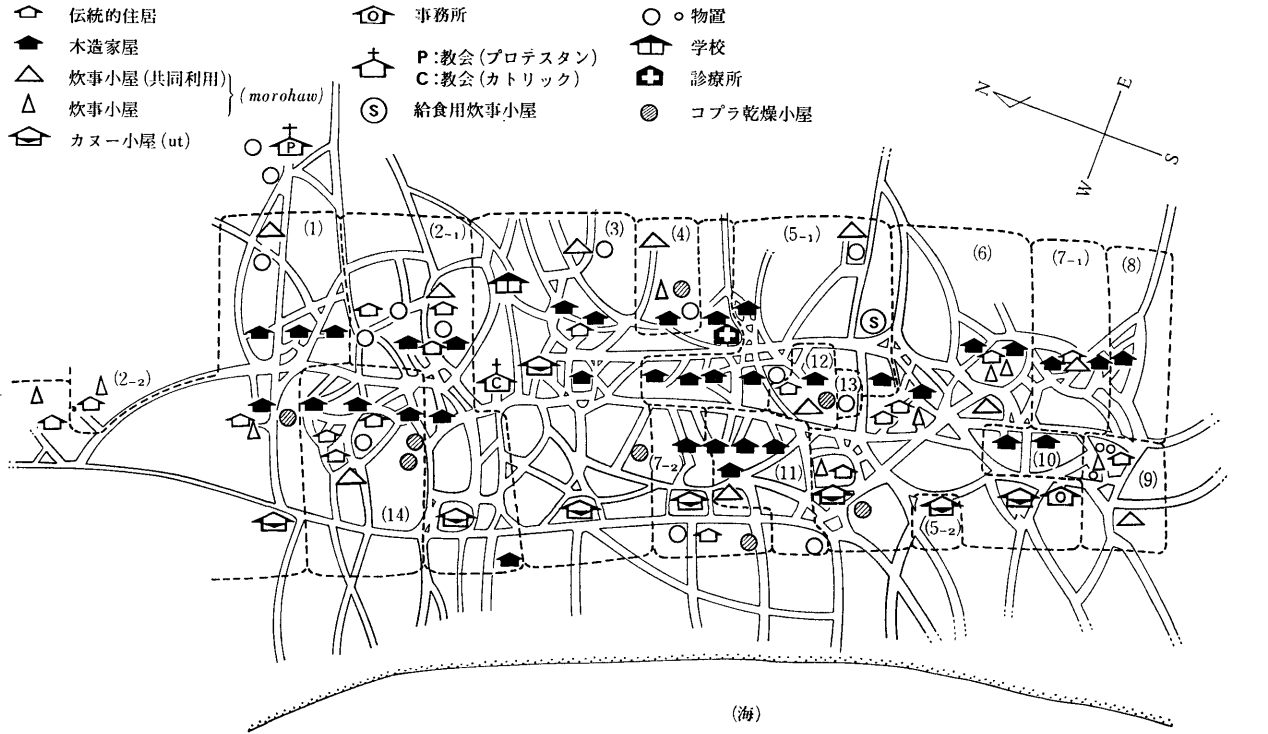
種々の伝統的家屋の建築様式は、いずれも構造的にたいへん類似している。建築材として利用できる植物の種類が豊かでなく、おなじような材料を使用するためである。このことについては、5章でカヌー小屋の建築構造を例にとり、くわしく述べてみたい。

3. 家屋の配置と道

サタウル島においては、*pasapasu* 内の家屋配置の構成が、“コの字型”になっていることが多い。コの字型の中央の空間が、*pasapasu* ごとの食事、作業のための空間として利用されている。*pasapasu* のひとつのカマドで料理された食物は、ひとつの住居用家屋 (*im*) に住んでいる人びとのグループごとに分配され、それぞれの住居の前にひろげられた食物を取り囲んで食事が始められる。住居と住居の間隔は狭く、*pasapasu* の構成員がつねに、相互に顔をつき合わすことが容易な距離に家屋が配列されている。火とカマドを共有し、共同労働と食物の公平分配にもとづいて *pasapasu* は、*pasapasu* の結束、紐帯を理念としている。家屋は、このことを強化するように意図的に配置されていると考えられる。とりわけ、コの字型の中央の空間が、*pasapasu* の象徴として存在しているといえるだろう。

プルスク島においても、1957年以前は、サタウル島と同様な家屋構成をなしていた。それが、1957年に35棟の木造トタン葺き住居が建築された時に、それまでと異なった家屋配置にかえられた。家屋の配列を集落の段階で整えることに配慮が払われた。家屋は、集落のなかで南北に2列、一部は3列に配列された。屋並の間隔を充分にとり、中央に道がつけられた。これは、ミクロネシアの政庁の行政官により決定された。このことは、それぞれの *pasapasu* の理念、機能にたいする配慮に優先して、集落の整備計画がはかられたことを意味している。

家屋の配置の変更は、これまでの島の道のありかたにも影響をおよぼした。元来、コの字型の家屋が配置されていた *pasapasu* では、コの字型の中央の空間を核とし、核と核、つまり、*pasapasu* と *pasapasu* を結ぶものとして道があった。それが、列をなすように家屋が配列されることによって、集落を南北に縦断する道路の重要性和使用頻度を高めた。家屋は、この道路に面してたち並んでいる。家屋の1棟1棟と集落を縦断する道路とが結びつけられたのである。*pasapasu* は、核であった空間を失ってしまった。そのために、*pasapasu* の家屋と家屋を結ぶ道があらたにつけられた。この道は、集落を縦断する道に交差したりして複雑に発達するに至っている。



- 図5 pasapasu と道
- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| (1) Hawarei (1) | (6) Meganifar (1) | (11) Hawarei (3) |
| (2) Hawarei (2) | (7) Har | (12) Paraka |
| (3) Witow | (8) Uhma | (13) Katuman |
| (4) Hawpuluwat | (9) Meganifar (2) | (14) Hawpulap |
| (5) Puer | (10) Uihuhu | |

..... は pasapasu の土地の境界を示す。
 [(7), (8)] および [(5), (13)] はそれぞれひとつの pasapasu として機能する場合がある。また suffix のついている pasapasu は、土地は分離しているが、機能としては一体である。

Hawpupalap の *pasapasu* は、このような家屋の配置形態の変化を比較的受けにくい敷地であったので、伝統的住居を建て増したときに、在来の木造建築とともに、ほぼ、コの字型の家屋配置を再構成することで、伝統的な家屋の配置形態を残している。そのため、中央の空間が道の役割をはたしている(図5参照)。

このように、木造住宅建設にともなう集落の形態の変化は、*pasapasu* の内的結束をはかる機能を弱めた。*pasapasu* の単位でまとまっていた家屋の配置にかわって、集落の単位で家屋の配置をまとめる配慮が払われたからである。1棟、1棟が、*pasapasu* ごとに閉ざされていた配置から、集落全体に開かれた配置への転換がおこなわれたと解釈できよう。その影響は、住居以外の家屋の配置にも及んでいる。炊事小屋(*morohaw*)が、*pasapasu* の中心の位置を離れて、人通りの多い道をさけるように、海岸部あるいは森(*lewara waru*)の近くに場所を移した。通りかがりの人に食物を勧める習慣があるためである。

道は、すべて人の足で踏みつけられてきたふみわけ道である。道の使用頻度は、道の規模となってあらわれない。道は、その使われかたから3つの性格に分類することができる。この性格の違いは、男女の行動様式の相違に起因している。

前述のように、*pasapasu* は機能的にも、象徴的にも核となる空間を失ってしまった。それに対応して、無秩序に、距離がへだたった *pasapasu* 内の家屋と家屋とを結ぶ道が、人の動きにしたがって新しく発達した。こうしてできあがった道を利用するのは、主に女性である。

母系出自と妻方居住という規制にもとづいて、各世代の姉妹を軸に形成された *pasapasu* は、農業生産、分配などの単位として社会集団の基礎になっている。そのことは、女の日びの生活を *pasapasu* 内で完結したものとしている。女は、他の *pasapasu* の人びととの接触、交流が少なく、ぎゃくに、*pasapasu* 内での交流は活発におこなわれている。相互に住居を訪問し合い、雑談に花をさかせる。女の1日の生活行動は、朝夕の礼拝に教会に行くことと、タロイモ耕作、コプラづくりに森へ出かけることを除けば、*pasapasu* 内での行動に終始する。

女の生活行動と正反対に、婚入した男は、他人の住居に出入りすることは稀である。概して、婚入した男たちの関係は親密でないことが多い。彼らの関係は、この島の人間関係の基本となっているキョウダイ(*pwipwi*)の範疇にははまらないが、おなじ *pasapasu* の構成員としての諸権利、義務はおわされている。そのため、彼らの関係は、一般的に、義務的な仕事として消極的に共同作業をおこなったりはするが、*pasapasu* の男たちだけで漁に出かけたり、積極的に相互の住居を訪れたりすることは少ない。*pasapasu* 内の住居と住居を結ぶ道は、女の道だといってよいだろう。

男たちにとって、生活の中に占める比重のたかい場所は、海とカヌー小屋(*ut*)である。カヌー小屋はカヌー(*wa*)の建造、修理、ココヤシロープ(*araluw*)をなつた

りする作業の場や、集会所としての機能をもっている。そのため、男は、1日のかかりの時間をここで過ごすことになる。カヌー小屋への女性の立ち入りは原則的にタブー (*epinu*) となっている。

このカヌー小屋を核として、道は集落に放射状に広がっている。この道と集落を縦断する南北の道は、男が遠くのカヌー小屋に行き来するとき、彼の *ainang* の *pasapasu*, *pwipwi* を訪れるのに利用されている。このような道は男の道とよべるだろう。

3番目の道は、森 (*lewara waru*) へ通じる道である。タロイモ耕作にパンノキの実の採取に、コプラづくりにと利用される。図5にみることができるように、集落から森へ続く道は多いが、森の中では数本の道へと収束している。とくに、女が集落を縦断することをさけて森へ入ろうとする意図がそこに見うけられる。他の2つの道が、男女の性によって特徴づけられるのにたいし、この道は、性的な差異にかかわらず、島の人びと全員に利用されている道である。

IV. *pasapasu* における居住形態

前章で、集落の構造、家屋の構成が、社会組織としての *ainang*, *pasapasu* に影響され、あるいは、それに立脚したものとして形成されていることを述べた。つぎに、それぞれの *pasapasu*, 住居での居住形態を、*ainang*, *pasapasu* の構造との関連を中心にみてゆきたい。その具体的事例として、*pasapasu* の一つ、*Hawarei* をとりあげた。

この島の12の *pasapasu* は、11の *ainang* によって形成されている。2つの *ainang* は、構成員が減少したため、独自に *pasapasu* を形成せずに、他の *ainang* の *pasapasu* と火、カマドを共有し、ひとつの *pasapasu* として機能し、ぎゃくに、*Meganifar* の *ainang* はふたつの *pasapasu*, ここでとりあげる *Hawarei* の *ainang* は3つの *pasapasu* に分節化している。

Hawarei の *ainang* は、3つの *pasapasu* に結果的には分節している。しかし、*ainang* は結束と紐帯を理念としているように、島の人びとも、*pasapasu* の分節を好ましくないものと考えている。*pasapasu* は、構成員の系譜深度が増すことにより、*pasapasu* のリネージ (*lineage*) がマイナー・リネージ (*minor lineage*) を生みだす。*pasapasu* の分節化は、この *minor lineage* の機能の発達に起因している。具体的には、構成員の増加と食物の分配問題が引き起こす紛争が直接の契機となっている。

ついでながら、サタウル島では、8つの *ainang* が16の *pasapasu* を形成している。この島は、面積が1.36km² しかなく、厳しい食糧事情にある。この島での *pasapasu* の分節の理由も食物をめぐる紛争に端を発したものであるという。

親族関係名称は、いわゆるハワイ型の体系に属している。平行イトコ、交差イトコを問わず、イトコは *pwipwi* の範疇に入れられている。この名称関係では、*pwipwi* 関

係にある両者のこどももまた *pwipwi* 関係をもつことになっている。出自の *ainang* を異にした人びとの間での *pwipwi* 関係は、比較的短い期間で意識されなくなるが、おなじ *ainang* に所属する人びとの間では、*pwipwi* 関係が始まった世代から何世代経ようが *pwipwi* 関係が意識されている。したがって *ainang* の同世代の構成員は、すべて *pwipwi* と認識されている。生物学上はおなじ父、母から生まれた兄弟も、この名称体系でのキョウダイも、ともに *pwipwi* の関係でよびあい区別しない。

ちなみに、*pwipwi* の語源は、口、耳、鼻などの“穴”を意味する言葉 *pw* である。目、耳などで認識したことを知らせあう関係が *pwipwi* である。

しかし、親族関係名称のありかたと無関係に、*pasapasu* の構成員の系譜深度が増加していく事実を否定することができない。*pasapasu* ごとに分配された魚を、さらに *pasapasu* の構成員に分配したり、タロイモ耕作や収穫などの雑事に関する *pasapasu* 内での決定と指導は、*pasapasu* 内の最上世代の女性がつとめている。このため、*pasapasu* はリーダーを擁している *minor lineage* と、他の *minor lineage* との間に地位の優劣の関係をつくりだしている。これが、*pasapasu* の分節化をいっそう促す要因のひとつとなっている。

Hawarei の *pasapasu* は、5 世代前に3つの *pasapasu* に分節し、それぞれが財産共有体として機能している。分節した3つの *pasapasu* は、ともにおなじ *ainang* 名の Hawarei の名称でよばれている。そのうちの1つの *pasapasu* をここでは、Hawarei (1) *p.* とする。

Hawarei (1) *p.* は分節化以後6世代を経ている。この時点で、ふたつの *minor lineage* が、それぞれ独自の機能をもちはじめている。かつて *pasapasu* 全体で機能していたものが、それぞれの *minor lineage* ごとの機能となっている。その具体的事例として炊事小屋の所有と料理のしかたをあげることができる。

ひとつの *pasapasu* は原則的にひとつの炊事小屋をもつが、Hawarei (1) *p.* は3つの炊事小屋を所有している。図6を参照に、その所有関係をみると、ひとつは Hawarei (1) *p.* 全体で利用するもの、第二のものは A, B が単位となって利用するもの、第三は C, D, E が単位となって利用するものに区分される。この事例はひとつの *pasapasu* が、さらに2つの *minor lineage* がつくる下位集団に分節化してゆく傾向にあることを示している。

共同で利用する炊事小屋は、主に、タロイモ、パンノキの実などの農作物の料理に利用され、*minor lineage* が利用するふたつの炊事小屋は、魚、貝類と米などを料理するために使用されている。農作物は、*pasapasu* 全体の土地からの収穫物であり、農作物の植えつけ、除草、および収穫などの作業は共同でおこなっている。したがって、共同利用の炊事小屋は農作物の料理に使用される。いっぽう海産物は、土曜日を除いて、各人が自由に漁に出かけて手に入れる。*pasapasu* が漁撈の単位となることはほと

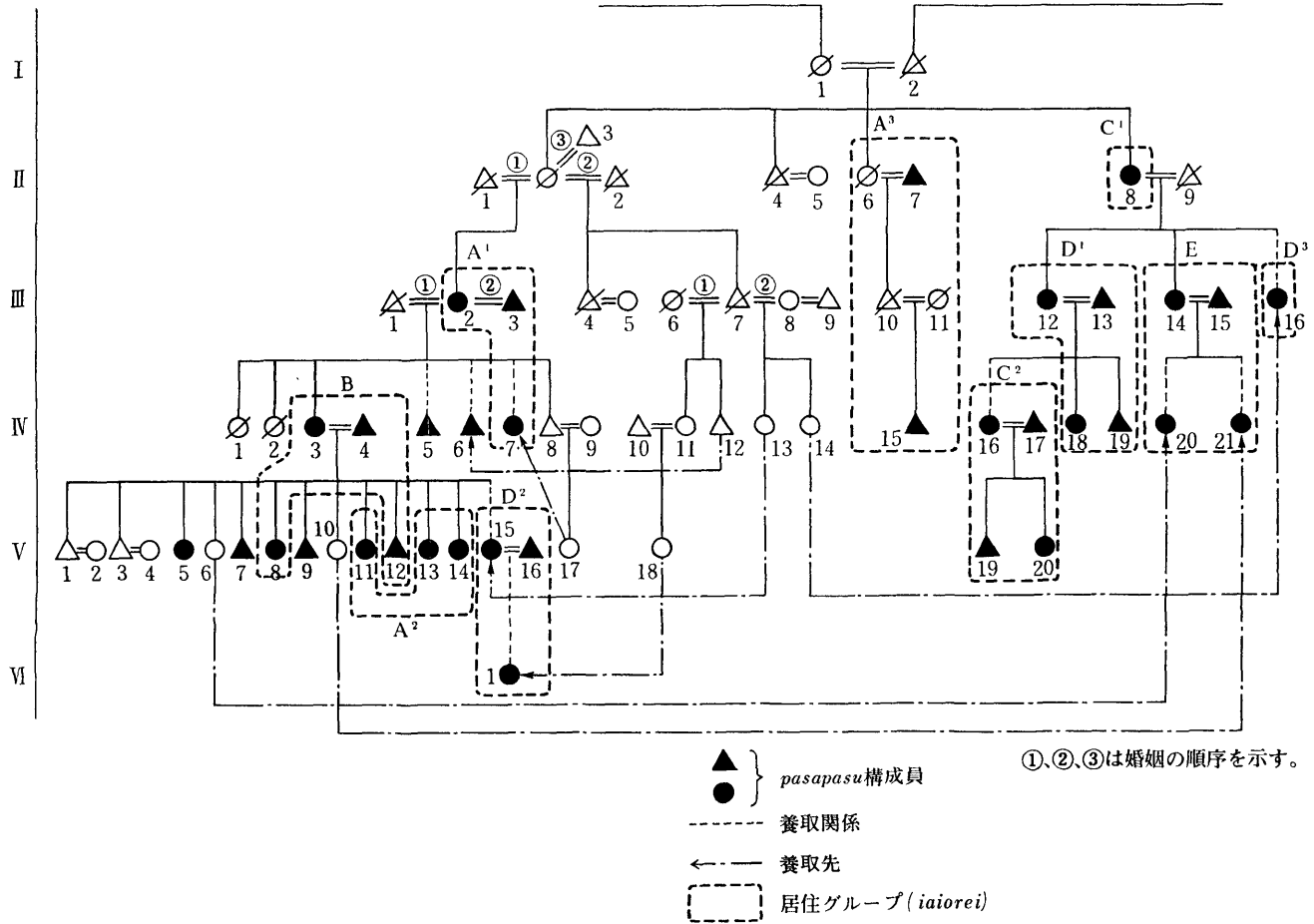


図6 Hawarei (1) pasapasu における系譜関係

んどない。獲物が多ければ、*pasapasu* の構成員全員に頭割りで分配するが、少ない場合には、分配しないで、*minor lineage* の成員で料理し食べてしまう。その料理には、*minor lineage* の炊事小屋が使われている。

3つの炊事小屋が象徴するように、*pasapasu*, *ainang* の結束と、分節化という二律背反を調和させようとする島民の価値観、および理念がある。そのための現実的手段のひとつとして、成員の住まいわけがあげられる。つぎに、その具体的事例を、図6を参照しながら考察することにする。

1. *Pasapasu* の構成員

図6は、*Hawarei* (1) *p.* の構成員と彼らの系譜関係をあげたものである。第1世代は、全員死亡して現在の構成員とはなっていない。現在は、図中●、▲で示した人びとが、*pasapasu* の構成員である。合計34名によって構成されている。*pasapasu* の構成員には、*lineage* 成員、養子、および婚入者がふくまれ、婚出者は除かれる。この婚姻関係、養取関係の結ばれかたにも、*pasapasu* の理念が意識され、具体化されている。

図6の *III*₁₂, *III*₁₄ の姉妹に婚入した *III*₁₃, *III*₁₅ は *pwipwi* 関係にある男たちである。2組の *pwipwi* が、それぞれ2組の夫婦をつくっているのである。同様に、*II*₃, *II*₇, *III*₃ もまたおなじ *ainang* の *pwipwi* であり、おなじ *ainang* の3人の女たちと結婚している。このようなかたちで、婚姻が結ばれることが、もっとも好ましいものであると島の人びとという。

ひとつの *pasapasu* に所属するすべての女性が出自をおなじくしていること、*pasapasu* は親子関係にもとづいていること、*pasapasu* の構成員の *pwipwi* が相互に紐帯を重んじていることの3点が、*pasapasu* の集団としての団結を強化する重要な機能となっている。

それにたいして、婚入してきた男は、別の *ainang* の *pasapasu* から入ってきた人びとである。それぞれが異なる *ainang* に属する男たちの関係では、それが *pasapasu* の団結を強化する方向には働かない。また、婚入してきた男の妻とその子供たちの紐帯が強化されるときには、それは、*pasapasu* の団結をはかる機能としては働かず、*minor lineage* を強化することになる。*Hawarei* の *pasapasu* が3つに分裂したような動きをおこす危険性をつねに秘めているのである。上述のような婚姻関係を結ぶことを、もっとも好ましいものとする理由がここにある。婚入した男たちの弱い関係を強化し、*pasapasu* の内部結束をはかろうとする理念がみられるのである。

養取慣行のなかにも、内部結束の強化をはかるための意図からおこなわれている事例をあげることができる。*Hawarei* (1) *p.* で、9例の養取がおこなわれている。

養取慣行は、中央カロリン諸島、東カロリン諸島一帯でひじょうに盛んにおこなわ

れている。養取の動機は、一般に、つぎのような理由によっている。

- (1) 夫婦に子供がない。
- (2) 友人関係, *pwipwi* 関係の絆を強化する。
- (3) 両親を早くに失った子供に適当な育て親がない。
- (4) 婚出した男が, *pasapasu, ainang* に残した権利を子供に代行させるために養取してもらう。
- (5) 私生児として生まれたため、養取してもらう。

以上のようなものであるが, *Hawarei* (1) *p.* では, 9例中2例が, (2)の動機によっている。*III*_{14,15} の夫婦に子供がないことも理由のひとつであるが, *III*_{3,4} の娘2人を(2)の理由で養取している。おなじ *ainang* の成員間では, 実母も実母の姉妹にたいする親族関係名称も, とともにハハ (*ineinu*) の関係にあり, 関係名称上のハハに養取されてもおなじハハの名称をもちいる。にもかかわらず, おなじ *ainang* 内で養取されていることは, 親族関係名称が, 関係両者の相互の紐帯をはかる役割をそれほどはたすことはなく, 具体的な養取のかたちをとることではじめて *minor lineage* の発達を推えることに貢献できると考えているからである。*minor lineage* をできるだけ融合させようとする配慮にもとづいていると解釈できよう。

*IV*_{13,14} の姉妹は, 産みの母が, サタウル島の男と結婚して, サタウル島に行ったため, (3)の理由により養取された。このとき, 2人がそれぞれ, 別の *minor lineage* に養取されているのも, ふたつの *minor lineage* の融合を, 2人の養子 (*muimui*) を通してはかろうとするものである。

なお, 養子は, 養母の死亡にともない, 養取関係は消滅し, 養子は自分の *ainang* が形成する *pasapasu* に移り住むのが原則である。同様に, 婚入した男も, 配偶者が死亡すれば, 自らの *pasapasu* に帰る。*II*₃ がその例にあたるが, *II*₇ のように, 長く婚入先で暮らし, その *pasapasu* に貢献し, 老齢化した場合には, 死ぬまでそこで世話を受けることもある。その判断は, 女性のリーダーがおこなっている。

2. *iaioarei*

1棟の住居用家屋に住む人びとのことを, *iaioarei*, または, *iaut li imai* とよぶ。「1戸の家の内側」というような意味である。*Hawarei* (1) *p.* には, 3棟の木造トタン葺き家屋と2戸の伝統的ココヤシ葺き家屋がある。この5戸の住居用家屋 (*im*) に, *pasapasu* の構成員がどのように住まいわけているかを示したのが, 図6中のA, B, C, D, Eである。AとEは伝統的家屋である。図中, A¹, A², A³ がAの家屋で寝起きをともにする *iaioarei* であり, 同様に, C¹, C², D¹, D², D³ もそれぞれひとつの *iaioarei* である。

Pasapasu の構成員でありながら, *iaioarei* に属しない4人の未婚男子がいる。この4

人はカヌー小屋に寝起きしている。*pasapasu* の未婚の男女は、養子を除いて、おなじ *ainang* に属している *pwipwi* で、その性的な接触を回避しようとする配慮がはたらいているからだと考えられる。異性の寝具であるゴザ (*mangiruta*) に触れることすらタブー (*epinu*) とされるのもおなじ理由によっていると考えられる。女の子供 (*aat*) は、初潮を経験することで、1人前の女 (*labut*) として社会的に認められる。男の子供 (*aat*) は12歳前後になるとフンドシ (*epereru*) を与えられて成人となり、カヌー小屋での寝起きが始まる。ただし、今日では、*pasapasu* に家屋の余裕がある場合には、それが未婚男子専用に使われることもある。

それぞれの家屋に住む *iaioerei* の構成員の決められかたと系譜関係に一定のルールは見られない。たとえば、A の家屋の *iaioerei* は、A¹ の老夫婦 (III_{2,3}) とその養子 (IV₇)、A¹ の老夫婦の孫 (V_{11,13,14})、A³ の老人 (III₂ のオジ=II₇) とその孫 (IV₁₅) の計8人である。C の家屋には C¹ の老婆 (II₈) と、その娘に養取された夫婦 (IV_{16,17}) とその子供2人 (V_{19,20}) の C² の計5名が住んでいる。D の家屋には、D¹ の夫婦 (III_{12,13}) とその2人の子供 (IV_{18,19}) に加え、D² の夫婦 (V_{15,16}) と養取した子供1名 (V₁₈=VI₁)、それに C¹ の養子 D³ (III₁₆) が住んでいる。D² の夫婦は養母が B の家屋に住み、D³ の養子 (III₁₆) の養母は C の家屋に住んでいる。この D の家屋には、2組の夫婦が住んでいることになる。E の家屋と B の家屋には、親子関係を基調とした住まいわけがされている。

住まいかたにおいて、*iaioerei* の構成員は、親子関係、*minor lineage* を基調としつつも、*minor lineage* の独立を抑制するために、5戸の家屋に *pasapasu* の構成員を混住させるように努めている意図がくみとれる。*pasapasu* の構成員の決定が、*pasapasu* の全体の結束と紐帯とを考慮に入れているのにくわえ、家屋1戸1戸の独立的機能を抑制することを意図している。それが、ひいては、*pasapasu* 全体の結束に連なることになると考えているからである。家屋の機能については、次章で触れる。

V. 家屋の建築様式

1. *ut* (カヌー小屋)

ut は、カヌー小屋と訳すには適切でないほど多くの機能とその可変性とをそなえている。未婚男子が寝起きする場として、男たちの団らんと休息の場として、カヌーの建造、収納の場として、あるいは、ココヤシロープをなったりする作業の場として、カヌー小屋は、男たちの日常生活のなかでもっとも重要な場として存在している。重病人が発生したような場合には、病人とともに、*pasapasu* の構成員は全員がここに移り住み、看護にあたる。住居と同様の使われかたもされるのである。この場合には、女もカヌー小屋を利用することが許されている。

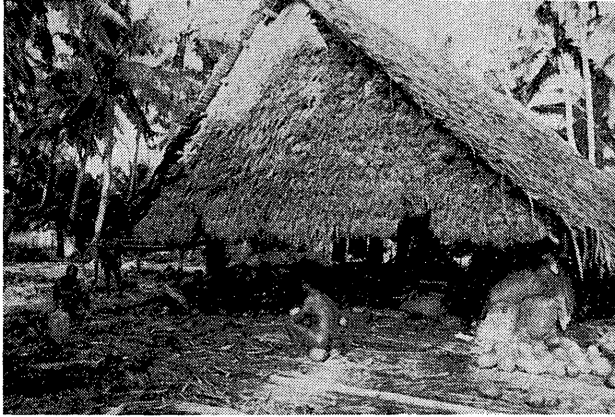


写真4 カヌー小屋 (*ut*) の全景, *Pulap* 島からカヌーでやってきた人びとがゲスト・ハウスとして泊っている。

日常生活においての機能の他に、パンノキの実の収穫や、葬式などの儀礼の場として、また島の玄関口としての象徴的な存在でもある。島に入る、人、ものは、一応この *ut* を経由することが原則である。したがって、他島からの訪問者には、ゲストハウスとして、ここに寝泊りが許される(写真4)。そのほかにも、神々 (*ianuw*) から病気に至るまで、ここを經由して上陸すると考えられ、かつては、守護神的な神を祭っていたという。

島には、9戸の *ut* があり、うち2棟は島の共有物である。ひとつは、島の内陸部にあり、島の会議と学校の教室がわりに用いられている。他のひとつは、島の北部の水路 (*Lemetaw*) の近くに、巡航船の入港のときのために建てられている。

他の7棟は、*ainang* の単位で所有され、*pasapasu* 単位で利用している。5つの *ainang* により、7棟の *ut* が所有され、他の6つの *ainang* は *ut* を持たない。しかしながら、*ut* は、その機能の多様性と重要性によって、島の公共物としての性格を備えているため、島



写真5 カヌー小屋の屋根の葺き替え作業、手前の男が持っているのがココヤシの葉を編んだマット (*iashi*)。

の人びとの自由な使用がかなり認められている。所有者である *ainang* とその *pasapasu* は、優先的にカヌーを収納することができること、必要な場合には、住まいとして占有できるほどの権利をもっているにすぎない。

したがって、この *ut* の屋根の葺き替え作業には、島中の男たちが参加する。女たちも、屋根葺き材としてのココヤシの葉を集め編む作業にくわわる。ほぼ年に1度、この作業は島全体の共同作業としておこなわれる(写真5)。

1) *ut* の部分構造と材質

ut の各部の構造と材質は次のようになっている(図7参照)。屋根を支える4本の柱(*iuru*)は、タコノキ(*Faach*)を丸太のまま利用したもので、土中に深く埋めこんでいる。タコノキは、横からの力にたいしては柔軟性に富み、縦の方向に加わる力には強い特性をもっているので、支柱の役割によく適合している。

桁(*hinoi*)は、タコノキの支柱がふたまたに枝分かれした部分を利用してのせられている。桁材は、パンノキ(*mai*)を角材にして用いている。太さは、30 cm×27 cm くらいが標準である。

桁と桁には梁(*iuramung*)がわたされる。材質は、桁とおなじパンノキが使用される。桁と梁は、ほかの各部と同様に交差するところをココヤシロープ(*araluw*)でしばられる。桁と梁とは、それぞれ4本の支柱の上で交差する。梁が桁の上に位置して交差させるのは、カヌーの出入口が梁の側にあるためすこしでも梁を高くするためである。

この梁の中央部に、丸太の棟束(*pootifat*)をたてる。材質は *aiu* とよばれる硬質の

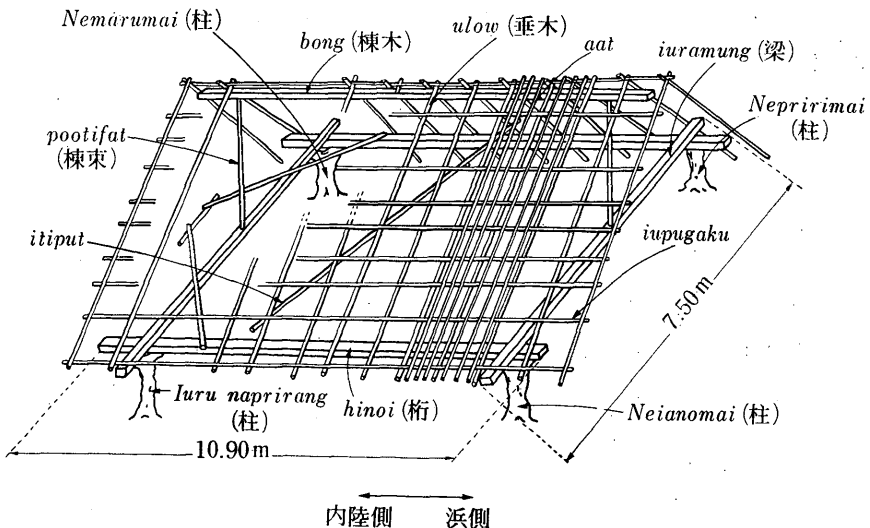


図7 カヌー小屋(*ut*)の建築構造

木であり、カヌー (*wa*) の部品のなかでもっとも強度を要求されるアウトリッガー (*tam*) と腕木 (*kio*) とを固定する部分 (*iam*) に使われるほど強い材である。棟束の長さは、屋根の傾斜角が45°になるように、つまり、屋根の垂木 (*ulow*) が、棟束と梁の半分がつくる二等辺三角形の斜辺となるように決められる。

棟束の上に、角材の棟木 (*wong*, または *bong*) がのせられる。材質はパンノキ。棟木と桁に垂木 (*ulow*) を11本おろす。垂木には、タコノキを丸太のまま使用する。棟木は、たった2本の棟束に支えられているにすぎないから、棟束にかかる重みを支えるように垂木が組まれている。垂木は、棟木の上で、反対側の桁からの垂木とココヤシロープでしばられる。組み合わされた垂木が、棟木をなかばつりあげるようなはたらきをしている。すべての *ut* は、今日では11本の垂木を使用しているが、かつては9本しか用いなかったという。したがって垂木1本1本についての固有名称も、今日でも9本だけにしかない。

11本の垂木には、10本の横木 (*iupugaku*) が結びつけられている。屋根のねじれを防ぐとともに、屋根葺き材のココヤシの葉を編んだもの (*iashu*) を結びつけるための細い縦木 (*aat*) を取りつけるはたらきをする。*aat* は垂木に重なるように、さらに、垂木と垂木の間2本の *aat* がとおるように取り付けられる。したがって、計37本の *aat* が垂木に平行に取りつけられる。

aat 材に使われる木は、直径7cm前後と細く、かつ長く育つ。しかもたいへん軽く、屋根材としての利点に富む。その反面、腐蝕が早いため、数年で交換する必要がある。大量に必要であることから、森のなかで、植林、栽培されている。

垂木、縦木はともに、桁から約70cmつきだして取り付けられ、さらに、屋根を葺いているココヤシの葉が長く垂れ下がり、風雨の吹き込みを防ぎ、また、利用可能な空間を最大限まで広げている。

風圧による横揺れと、それによっておこるひずみにたいする配慮から、屋根裏には、垂木にたいして斜めに丸太がわたされている。*itiput* とよばれ、屋根裏の3分の2ほどの部分に取りつけられている。

桁と梁の交差を直角に保つためには、桁と梁とに角材をわたして固定させている。こども、直角二等辺三角形をつくるように取り付けられている。これはまた、屋根の妻の部分にココヤシの葉を葺くための *aat* を補強する役割もはたしている。

妻の部分は垂木を使用しないが、*aat* と *iupugak* を格子状に組んでいる。ここには、地上より、約1.5mの高さまで屋根を葺き、一部分に、カヌーの船首が通れるように切り込みが入れられている。

2) *ut* の形態と全体構造の特徴

各部の構造と関連して、*ut* 全体の特徴として、次の9点をあげることができる。

(イ) カヌーの出し入れのための限界の高さ約1.5mにまで屋根の軒を下げている。

桁よりも約 50 cm 下まで屋根を下げ、吹き込む雨をさけることで、利用できる空間を最大限まで拡張しつつ、建物全体を風圧をさけるために、極力低くする工夫がなされている。桁と梁の組み方も、カヌーの出し入れ側の梁を桁の上ののせて、屋根、建物全体を低くしている。

- (ロ) 屋根葺き材として使用するココヤシの葉、または、タコノキの葉が防水性に乏しいため、水はけをよくするために、屋根の傾斜を充分にとっている。
- (ハ) 棟木を支える2本の棟束に加え、垂木も棟木を支える構造となっている。
- (ニ) (ロ)、(ハ)により、屋根に強い傾斜度をつける必要性と、風に対する防備から、屋根が45°の傾斜をつくるように、梁と棟束の長さの比率が決められている。(イ)のように、極力屋根、建物を低くしようとする工夫にもかかわらず、屋根は結局、高くなってしまって、屋根裏に不必要な空間をつくりだしている。
- (ホ) 屋根葺き材のココヤシの葉を編んだものを、屋根に結びつけるために、屋根に、垂木のほかに、さらに多数の木を縦横にわたす複雑な屋根の構造をしている。
- (ヘ) 屋根、および上部構造は、4本の柱だけによって支えられる。
- (ト) 木と木を組みあわせる場合、ほぞを彫り込まないで、すべて、ココヤシロープでしばる方法によっている。これは柔軟構造による外力の吸収という利点をもっている。
- (チ) 屋根全体に、三角形の構造が多くとり入れられ、全体の構造の強化につながっている。
- (リ) 建築材は、角材と丸太で、板をまったく使用していない。

建築物のこうした特徴は、とくに、屋根葺き材としてのココヤシの葉、タコノキの葉がともに防水性、耐久性などにおいて、あまり秀れたものでないことが強く影響を与えているといえよう。比較的降雨量の多いこの地域の気候が、いよいよ、屋根に支配された建築物を生み出す原因となっている。つまり、*ut* は屋根の下の空間を利用する家屋でなく、屋根のなかの空間を利用する建築物となっている。

構造の点では、ほぞを彫って継手仕口をつくったり、板をつくるための充

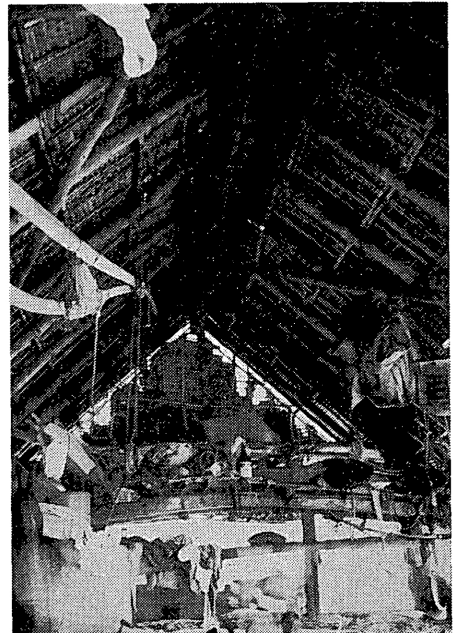


写真6 カヌー小屋 (*ut*) の内部、棟木、棟束、垂木などがみえる。

分な道具を、近年までもたなかったことに関連しているといえよう。

雨にたいする *ut* の構造は、風にたいする対応、工夫と背反する性格にあり、この問題が完全に解決されないまま、今日の構造と形態をつくっているといえよう(写真6)。

2. *im* (住居用家屋)

ut (住居用家屋) に、*im iani ching* (木造トタン葺き住居) と *im iani puwn* (伝統的ココヤシ葺き住居) の2種類あることは、これまでに述べた。木造トタン葺き住居は、この島に37戸ある。うち1戸は、たまに島に來訪するカトリックの宣教師のものである。これにたいし伝統的住居は15戸にすぎない。15戸のうち、じっさいに人びとが生活の場としているのは、7～8戸である。ほかは、屋寝用であったり、高床式の木造家屋への出入りが苦痛な老人専用のものであったりする。

ほぼ類似した文化と生活様式のなかで暮しているサタワル島には、木造トタン葺き住居は3戸しかない。そこでの住居をめぐる生活様式は、旧来の伝統的な様式を維持していると考えられる。それに比較し、この島では、木造住居が登場することにより、家屋の配列でおこった変化と同様に、生活様式、住居の機能の面でもいくらかの変化をおこした。

1) *im iani puwn* (伝統的住居)

伝統的住居の建築様式は、カヌー小屋 (*ut*) のそれと基本的にはかわることがない(図8参照)。カヌー小屋が、島の男たちの日常的な生活の場の連続として存在し、開かれた空間を象徴するかのよう、壁のない建築物であるのにたいし、住居は、外の空間を遮断する閉ざされた空間である必要がある。この差が壁の有無となっているにすぎない。

壁は、ココヤシの葉を編んだマット (*kini*) をたてかけるようにしてつくられている。空間を閉ざすことにたいする気の配りかたは相当なものである。出入口は極端に小さくつくられており、なかには、這ったり、身体をかがめてしか入れないものもある。人通りの多い道に接した住居ほど、その傾向は強くなる。もちろん、窓を持たない構

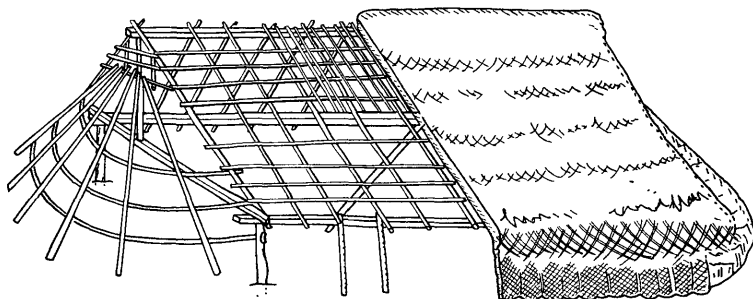


図8 伝統的住居の建築構造

造である。内部は、そのため薄暗く、外部から内をのぞくことはできないが、内部からは壁をとおして外を見ることができる。物理的に空間を遮断すること以上に、象徴的に遮断しているといえるかもしれない。

天井をつくらない構造だから、屋根の空間が広く、屋根葺き材の材質とあいまって、涼しさの点ではたいへん秀れている。屋根裏の部分に、桁と梁に木をわたして、日用品、財産類を置くようにしたりもする。彼らは、財産とよべるようなものをそれほど持っているわけではないので、その程度で間に合う。小物、衣類などは、垂木からココヤシロープをたらし、ひっかけたり、結びつけたりして保管している。伝統的住居の欠点は、湿気にたいする防備が充分でないことである。

湿気にたいする一応の対応の工夫もされている。家の内部、および周囲には、珊瑚礫 (*Faima*) を厚く敷きつめて雨水が早く土中にしみこむように工夫されている。砂地にたてられている住居とはいえ、長い雨が降りつづくと家屋が湿気ることはやむを得ない。

家屋内の珊瑚礫の上には、ココヤシの葉を編んだゴザ (*kini*) を二重に敷き、さらに、タコノキの葉を編んだゴザ (*frieniwa*) を敷きつめている。部屋の隅には、タコノキの葉を細かい目で編んだゴザ (*mangiruta*) を巻いて置いてある。これが寝具であり、就寝時には、これをのべて、薄い布をかぶるようにして寝る。蚊に刺されないためでもある。

さきにも述べたように、寝具に異性が触れることはタブー (*epinu*) である。タブーは、今日、キリスト教の布教とともに急速に失われつつあるが、今日まで、比較的残っているのは前述の未婚男子がカヌー小屋に寝起きする習慣であろう。このような性的な発育にともなう問題を回避する必要は、間仕切りのない家屋の構造にその背景があるといえよう。間仕切りの代りに、今日では布製の蚊帳を1戸の家屋にいくつか張ることがおこなわれるようになった。そのため、1戸の家屋に、かなり成長した未婚男子が姉妹たちと同居する例も見うけられるようになった。

小規模の伝統的住居は建築が比較的容易におこなえる。そのためか、重病にかかった人の病がいた場合には、月の出ない夜を選んで、住まいをかえる慣習がある。

2) *im iani ching* (木造トタン葺き住居)

1957年に、台風災害の援助の名目で建てられたこの住居は、建築材料はすべて船で運ばれてきたものである。トタン、2×4インチ角材、合板材、板材が建材である。窓の取り付け位置が各家により異なっているが、基本的には規格化されたものである。

木造高床建築はもちろん、床のある建築物は、この島では、これまでみることがなかった建築様式である。床は、標準的なもので、地上70 cm から80 cmの高さである。床は合板材を使用している。間仕切りはない。1～2カ所に出入口をつけ、2カ所に板戸の窓、それに1～2カ所にブラインド状に木を組み合わせた明りとり兼用の

窓をつけている。これが標準的な住居で、床面積は約 30 m² ほどである。

この住居の利点はふたつある。ひとつは、トタン屋根に樋をつけ、ドラムカンに清潔な水を集めることができることである。集落には、3カ所の井戸があり、3~4mも掘れば、容易に水を得ることができるが、砂地のため、その維持・管理がむづかしい。誰もが、自由に真水を得ることができるようになり、島の生活を便利にした。炊事、洗濯、水浴に水をふんだんに使えるようになったことの意味は大きい。

第2点は、高床建築による湿気の排除で、身体の健康に貢献したようである。いっぽうでは、島の生活や、自然環境に適合しない点もある。トタン屋根は、日中の太陽熱が、家の内部を温室にかえる。天井のない構造のうえ、上部が密封されているため、熱の逃げ場がないのである。そのため、床下を生活の場として利用し、家屋内は生活用具の保管だけに使用している例も1例だけあった。

床面積が、伝統的住居に比べ約2倍あり、屋根の下の空間で、人が自由に家屋内を動きまわれるようになった。家屋内も、窓から入り込む光で明るくなった。伝統的住居が狭く、暗いために、住居は睡眠のためだけの場であったのにたいし、木造家屋は生活のため、住むための空間として機能しはじめた。

そのような機能の拡大の事例のひとつに、食事の機能がある。かつての、食物は住居の外で料理し、外で食べ、外に保管していた慣習がくずれ、家の中に食物が持ち込まれるようになった。石油コンロが島に流入し、簡単な料理が家屋内で可能になったことが、この現象に拍車をかけた。食事にもなう団らんも、家の中でおこなわれるようになり、日常生活のなかで1日の生活行動に占める場所として、住居内の占める割合が多くなった。このことは、島の人びとの生活様式、行動様式が多様化したのではなく、かつて、家をとりにくく空間全体が家屋とともに住まいの空間として機能していたものが、家屋内に持ち込まれたことを意味している。屋内で立って動ける家屋の出現、つまり、屋根のなかの空間としての住居から、屋根の下の空間としての住居への変容が与えた住まいかたへの影響を示すものであるといえよう。

Ⅵ. むすびにかえて

この小論では、中央カロリン諸島の一離島での「家屋と住まいかた」を、自然環境、集落構造、社会組織と居住形態、家屋の構造との関連において考察してきた。

隆起珊瑚礁の島世界という自然環境は、植物相に乏しい。そのため、家屋の建築材には限られた植物をうまく工夫して用いる必要があった。そのことは、木を刻むための満足な道具をもっていなかったことと関連して、家屋構造を決定する要因となった。自然環境はまた、集落の位置を定める要因でもあった。いっぽう、*ainang*、*pasapasu* などの社会組織は、集落の構成のしかた、家屋の用いられかた、家屋の機能などの問題

と密接な関係にあった。

ところが、外部からの建築材の導入によって、家屋の建築様式が変化し、さらに、集落内の家屋の配列は外部から来た行政官によって決められた。行政官は、これまでの家屋の配列が、社会組織と密接に関連していたことを理解していなかった。これらのが、これまでの社会組織のありかたに変化をおこさせた。外部から導入された建築材が建築様式に与えた影響以上に、社会組織、社会集団に与えた影響のほうが大きかったのである。

このことは、家屋と住まいかたにおいて、家屋の形態の変化が、それを利用する人びとに新しい人間関係、社会関係をつくりだすことを示唆している。当然の帰結ながら、“もの”と“ひと”との関係は、常に表裏一体となって関連しあっているといえる。とくに、この島のように、出自集団が家族的結合の居住集団を形成しているような社会においては、社会組織、社会集団に内在するもろもろの問題が、家屋と住まいかたにおいて浮かびあがってくる。